

嘉永成晚集

特 別

^5

6590

63



へ5
6590
63

今月廿四日 信長様より



此の如く 信長様より 文は月

東解

信長様より 文は月

松二

千重を 信長様より 文は月

飲夜

仰せられたり 又 仰せられたり

物化

上を 下 仰せられたり 文は月

力尽

文は月 仰せられたり 文は月

果六

好まらぬ 仰せられたり 文は月

那六

まじりて 来るもくさの月 一角

う 気仙のどほつと 笑出 一角

あめりつら きたるは 已の 娘 一角

枝を 籠らして 枝偶の 流 一角

利生ふこ さいの 津の 欠 一角

枝を 籠らして ふこ さいの 津の 欠 一角

お入らぬ 八娘の ちを 一角

まじりて 来るもくさの月 一角

ほひ 立やせ 此後 中 月 此 二 六

年 一 熟 一 七 柿 一 月 一 二 六

ち 候 を やす ころ ち 子 此 を 候 候 二 六

生 涯 ち ち ち ち ち ち 二 六

嘆 ち ち ち ち ち ち 二 六

終 ち ち ち ち ち ち 二 六

春のけりなはたけをきふ牛のきり 里伯

はらりしきまのけり膝半ばよ 博

後よりふかきけりきやとわのきし 博

心^ド座のくまらり合ぬ 多

未のらふぬけりあまの雨ささるし 伯

あまのけりしきまのけり膝半ばよ 去

あまのけりしきまのけり膝半ばよ 去

ふらりしきまのけり膝半ばよ 此

煙のけりしきまのけり膝半ばよ 已

そらりしきまのけり膝半ばよ 多

船のけりしきまのけり膝半ばよ 際

紅雲のけりしきまのけり膝半ばよ 去

新月のけりしきまのけり膝半ばよ 博

あまのけりしきまのけり膝半ばよ 伯

境^り心たるを可らぬ長縄^中

珍しゆきそ城の流り語

眉^上庵北送る怨をハ素相^中

雛^上の細く多き^中傳^中

旅^上庵うつこと奇^中陽を世^中をた

ら^上うい時^中道^中一^中契^中り^中子^中ち^中信^中

枝^上お^中戸^中を^中異^中け^中た^中籠^中一^中玉^中を^中お^中

六^上何^中比^中何^中古^中海^中云^中

沖^上海^中を^中傳^中年^中を^中あ^中つ^中上

若^上と^中長^中道^中あ^中の^中序^中や^中の^中ら^中う^中續^中

誰^上難^中く^中は^中一^中五^中の^中あ^中

水^上晶^中れ^中根^中け^中ん^中縁^中從^中目^中あ^中あ^中り

こ^上れ^中を^中う^中り^中の^中こ^中ら^中と^中ま^中い^中

お^上ら^中い^中あ^中の^中月^中あ^中体^中り^中あ^中世^中の^中友^中

くら^上の^中田^中一^中昔^中海^中の^中種^中病^中

子^上海^中二^中角^中六^中何^中

石中歌

尺八の音をきくは清し一夏の月 一角
 笛十響をきくは清し一夏の月 星宿
 浴して月夜の清きやあそび 葉衣
 さし流や実をきくは清し一夏の月 昇六
 戸をきくは清きやあそび一夏の月 妙地
 道中よは清きやあそび一夏の月 知多

伐うるはるのあそびやあそびの月 深長
 ありしは清きやあそび一夏の月 者石
 ありしは清きやあそび一夏の月 泉流
 自深しは清きやあそび一夏の月 松二
 ありしは清きやあそび一夏の月 六
 ありしは清きやあそび一夏の月 二
 ありしは清きやあそび一夏の月 二
 ありしは清きやあそび一夏の月 松二

高き山に雲... 子をとめて
 屏六
 影清
 赤躰
 上伯
 一角
 法古
 有衣
 大... 不... 母
 後... 日...
 一... 浮... 名... 老... 名... 記... 行
 戴... 花... 花... 花...
 一... 一... 一... 一...

後... の... 山... 此
 子... 花... 花... 花... 花...
 子... 花... 花... 花... 花...
 子... 花... 花... 花... 花...
 子... 花... 花... 花... 花...
 子... 花... 花... 花... 花...

右... 記...

たし、あはしつるあはれを
きこひのあはれはあはれをたひひし

上関石

とくく物こくやあはれをたひひし

あはれはあはれはあはれ

あはれ

生てあはれはあはれはあはれ

あはれ

いりたあはれはあはれはあはれ

あはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ

あはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ

あはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ

あはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ

あはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ

あはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ

あはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ

あはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ

あはれ

三ノ一と云ふ用字は多し
八ノ一 殊に殊種は
其あけを同む 六合
ちりや細く 藍色は
一ノ一 本は後此等
其あけを同む 細く
六ノ一 此の用字の
多し

六 六 六 六 六 六

新 後 子 に ち ち ち ち ち ち
其あけを同む 殊種は
一ノ一 殊に殊種は
其あけを同む 六合
ちりや細く 藍色は
一ノ一 本は後此等
其あけを同む 細く
六ノ一 此の用字の
多し

六 六 六 六 六 六

歳をせむらふいと為し思ひて
六

月をの里のまはかりし
二

は月を月と書きし
二

声はうらまをきり
二

子入甲斐垣に難い
二

着座しをとり
六

圍中し遠を風
六

そもゆきやうふ
二

盡しそり
二

うらまよの
子

右奇ゆり

録典

父新や
船の
二

着る
二

うたひ子なはつたかいらんまをたて
うらひちの勢は家一
房恒ハ海とてぬ中法燈合井戸
ゆけさ一はたさき丁燈をる
杉せ風は月は夕倉直舟橋一
律一のわらう一み雲のまらう
石の上ぬれ社もたれさひいぬ

松二
物化
屏七
沼七
赤解
松葉

ひまのよぬるの雲を似流
檢校も杖恒よりしてせり入
あつはさそ海正見は雪を
秋もぬる海をさきぬぬぬ
又の雲りのハ裁ぬきぬ
石ころひし一袖の若ふさあやふん
はたはたは蓋とてあぬぬ

松栢と云くそはまの松の心と
昔ちかやかんころまはまの松

右音仙一折

菊の心と云くそはまの松の心と
昔ちかやかんころまはまの松

松栢と云くそはまの松の心と
昔ちかやかんころまはまの松

松栢と云くそはまの松の心と

菊の心と云くそはまの松の心と
昔ちかやかんころまはまの松

松栢と云くそはまの松の心と
昔ちかやかんころまはまの松

松栢と云くそはまの松の心と
昔ちかやかんころまはまの松

七夕

法界を興る

蘭石

多きよめたるやん徳をわし少袖

物と隈をまき月の印涼

おれそふ解^{コラナ}遠く一船をけて

ひより酒おれ急^{キヒ}瀬の酒

青き一のきしる美の一るく

心わししして使をきせる

松二

琴仙

時化

昇六

一孝人

そしけくは移ふん時あつる

瞬もせらる

沖舟と云神いそまきなが松

菅指のけくえんる石のよま

何るあ代のやれん松の洞はけ

そらりてりあをりく時境

夢をたふれ徳知く白くも

沢古

鶴^{ハシ}

和由

青石

夏

石

化

里物

名所は風流の録書 酬 仙

嘆きや身程はあらず 冷らぬ 仙

望しむもて 情なるまじく 仙

沙もれちりしと 東山 仙

羽うづ川が 谷ふ 峠 候の味 仙

村中は ともいふも なるを 月 園生 仙

細引の 渡り なるを 予 支 仙

立礼う 早大 池の 夏 暮の 夜 暮る 仙

好んと 暮る 此 心と ぬつり 合 仙

万 毎う 一 渡り 此の 深 暮る 仙

中 陣い ぬ 此 事 守 ぬ 暮る 仙

今う 且 中 なる 此 踏 け 長 心 配 仙

手よ ぬ ぬ 保 生う 暮る 暮る 暮る 仙

五のこころをよ倒に徹立
やうり渡り下法の月の影を
そと迫りつぬ山宿の影の
影その影に似のこころを
い川のつらあかしくなるさあなり
只枝おろし風く平あ海の面
とやうをよめて多に書きたる

似
は
有
者
二
の

力をまふ入ましくせんそくむ
とあつそをそくあつゆの 書
仙
子

右短仙り

花を移りの影あやとよや紅糸橋
るの祝 洗ひはめて 是を糸

落葉をうき紙しんこ
日暮し一燈をよそよそと
あつて

まきの柳しんこ
二れをい隠すをい
ま

て月をよりの事をも
いぬり

稽古しんこ

河原大深木のむす
おきり

者石

板の西丸しんこ
あつて

松二

さしははるあつて
津山

那也

友しんこ
あつて

早六

人しんこ
あつて

物化

梅子芳うして
体心

松長

梅しんこ
あつて

松長

梅しんこ
あつて

松長

梅しんこ
あつて

松長

老くも 侍女 亦士に 魂
切能く 暮らし 血乃 業
船を 月まに 染く 紗嵐
後し 髪て みる ちの 月
踊 物方 去は 梅子 梅
福の 玉一 儂引 世一 三用 札
初代 の 心 大 必 此 中
ふ 六 五 七 五 五

八重の 花を ちの 花に 染
世の 別 業を 色 の 道
むら ぶ 群 ちの 心 念 道
かす け 如く 映 心 道
道 心 業を 染 土 行 心
まを ちの 心 染 心 道
まを ちの 心 染 心 道
まを ちの 心 染 心 道

梅ありてはさきとて時てはひやく
家の玉鏡の流儀中のこととて
女とていふれなるもの寺
三孝の歌うちよき事なればみえ
美しく補ぬけ後のつこ
大つとよや月日増し底の月
晩橘の中みえむ 鐘
美 二 化 俗 二 六 五

乞食のそと山子たせ妻のあつと
福相のあつ頼の時わ
是つとよき時入國さつと
つとよき事なればみえ
美しく補ぬけ後のつこ
大つとよや月日増し底の月
晩橘の中みえむ 鐘
美 二 化 俗 二 六 五

右奇仙り

雲の影を月極ゆるむ
花の影を月極ゆるむ
舟の影を月極ゆるむ
舟の影を月極ゆるむ
舟の影を月極ゆるむ
舟の影を月極ゆるむ
舟の影を月極ゆるむ
舟の影を月極ゆるむ

舟六
里伯
舟六
舟六
舟六
舟六
舟六
舟六

五月廿一日 修永 舟六

松の枝を月極ゆるむ

舟六

松の影を月極ゆるむ

舟六

松の影を月極ゆるむ

舟六

松の影を月極ゆるむ

舟六

松の影を月極ゆるむ

舟六

松の影を月極ゆるむ

舟六

う
あやの歌きつ練りし風海ら
る津田津ししるゆき菜
何ふとこせしる母のあまを
一舟舟はまのゆとりり
標板し河名もま川そおしれ
車しし向ふ介おしし虫
まの光をりしゆりてめをりし
笑 尻 昇六 笑 尻 長

れをふのふ睡れ 潤布 六
あやうえんてり歌のゆり
夏旅の身ははるおれは
笑ししものゆりし 角
あやのあやのまき 尻 笑
あやのあやのまき 尻 笑
あやのあやのまき 尻 笑
あやのあやのまき 尻 笑

来くと市代のてらたぐり市門の
 遠らるるの草のあゝ七の
 征道と海一十年のよのよ
 せらの舟一くま新ふるお梅
 艘々舟れそかくり船
 ちい舟りおちる梅の子
 舟くくく止むと一よきの雨
 笑 六 六 六 六 笑

杖と力一道の凸凹
 中袋の月を照して糸の燈合
 ちやん一はぶ意の片まひ
 花材と鋪き縁のとうくし
 持こき一好くたの燈籠
 春のたねをまきつるほろかし
 相浮よまひこみのあ
 笑 六 笑 六 笑 六 笑

心を徳く日傍ふ常く為るを 右石
金糸の糸くはまはまきく 子

右石の如し

夕の月と草と花あるの如くは 一夏
若月や梅の如くは春の如く 右石
若月と草と花あるの如くは 右石

若月や花と草とあるの如くは 右石
雨を水と拾ひて月の如くは 右石
若月や花と草との如くは 一角
ちりや水と拾ひて月の如くは 一角
若月と草と花あるの如くは 一角

御徳の屋のまはり年々く
江戸府の徳を考へて御徳の
そはしとらんをく又御徳の
そはしを御徳のまはり
名はあまの御徳のまはり
さりたにいらる御徳の
おとよふえん御徳のまはりの
まはりいらる御徳のまはり

情むく御徳のまはり
追得とあてし御徳のまはり

身まはりのまはり御徳のまはり

五月廿五日 村山 一 角

旅徒 一 ねまふりしゆく

居る 一 へてふあ川より月夜に

市勢もへてふぬ親しむ中 一

是月切

五月廿六日 角

沸く 一 ゆはらふあめの紅もふれ

目の友はしきくこむるく

波也

何れの様もはや増りしん

松二

古きゆはたふのゆき

和しめ

あつと田もあつと川の絵圖

松英

石牙叩てきせり換りし

材化

豆もやう時雨追あつて結向の馬

た

鯉鱸の汁も解けもあま

笑

屋曲 一 作りし松也美し

た

た

利せしとてさるゝ人の後 他

家業とされぬおきか船の中 由

味とて知る土佐の土佐 英

月の光は清くして西提 記 化

風は清くして清くして 由

寂れし清くして清くして 昇六

社り多しふ柳の枝 二

ゆもさるやとてさるゝ 由

元もさる所のおきとてさるゝ 化

ゆもさるやとてさるゝ 由

袖乞とてさるゝ 六

寂れし清くして清くして 英

元もさる所のおきとてさるゝ 由

吹風とてさるゝ 由

前 踏 じ じ じ 蒲 の 成 水 の
川 舟 一 作 心 なる 難 又 近 一
と 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
三 人 と 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
後 の も 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
名 月 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
知 を 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
化 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

素 紙 の 粗 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ま ぬ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
松 の 所 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
馬 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
歳 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
花 の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
字 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

右 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

吹きさらけ夕の想と 江をふりぬ
通ての空に紅あや 船を 舟
事とらんやい衣多し 掃紅糸 月六
旭されば 流し 流るや 砂紅糸 相葉
船を ありきし 舟多し 舟紅糸 相葉
わらわの 舟の 舟 流に 紅糸 舟
二 舟 舟の 舟 舟 舟 舟 舟

舟

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

ふまき月ちあはれ **神皇正統**
るまのきく志あつそは旅まを
アハハハハ

帰る系尾ふまきくそ連ん

九月廿のついで **神皇正統**

いよあつて **神皇正統** 後の月 **神皇**

色紙と取まはれのれ **神皇**

確のちちやれ **神皇**

多川 ^{ツカガ} 類 **神皇**

眼 **神皇**

形ふれまあ **神皇**

櫃の系ふ **神皇**

英 屏六 松菜 一角 欽吉 松一

井のえきま〜梅雨の滴

と

意ち終〜世のいたいれんさちわと

ゆ

あつ〜とちん〜蟹の形は

ふ

影して〜つゆさるの海の声

葉

あやのさふ〜ぬをさそまら

た

月れ海の方と東と船をむけ

あ

あつ〜とちん〜あつ〜とちん

と

さる信をの君に〜とんせかい

二

ひまひ〜水〜動るあつら

六

岩〜根よ〜とちん〜とちん

も

あつ〜とちん〜あつ〜とちん

者石

あつ〜とちん〜あつ〜とちん

角

あつ〜とちん〜あつ〜とちん

六

あつ〜とちん〜あつ〜とちん

葉

遠嶺——雪の——失すけの
 又の——雪の——村——
 合の——雪の——
 糸の——雪の——
 堰の——雪の——
 湖の——雪の——
 雪を——下——

二 菜 角 二 六 七 六

風——雪の——
 雪の——
 行——
 小——
 雪——
 雪——
 雪——

六 菜 六 二 六 二 菜

葉のくまは田打の如し
云

春の仙舟

る月未だ四り来り念無ん

折つて揺らぎみれば隣りぬ

相葉

枯かきぬく細き月影

環也

酔つての袖の風は冷し

秋古

舟をさらりぬて送るは雲は

松二

船の舟は河よりいづれのおもひ

有石

次介の空るハ本を信るん

物化

氷柱くまほちりく

早志

根は雑炊持ちまうはあ

化

藍玉を原せそちをのまもり

化

汐風のそしもありて上

島

初、ふるより、卯の辰り出

かとの号、めまぬ枝ふ

まじりの能、あまの草、此枝

ふるまの、はな、やとそい

拘り、女に、梅も、火をと、吹る

女、此、宮、丸、ちり、梅、屋

流り、こ、さ、く、り、そ、あ、る、元、の、枝

古

、

亡

由

他

六

二

二

坊、く、暖、さを、持、ふ、杖、紐

古

^三初、此、花、一、葉、り、蛤、馬、刀

祝

菜

市、此、ま、り、を、た、ぬ、帚、自

由

付、初、ろ、子、節、く、似、る、白、も、る、き

菜

い、川、利、と、や、知、ぬ、月、代

二

早、う、勢、り、い、つ、花、信、の、た、く、心、く、ん

由

短、冊、の、外、あ、る、を、紙

不

侍人のまじりやまのこころに里の糸

歌人のこころにやまの眉の糸

花のうしろのまはりの花の糸

とちのまはりの花の糸

鏡のまはりの花の糸

まはりの花の糸

花のまはりの花の糸

化

化

化

化

化

化

化

子つねの精の糸

花の糸

花の糸

花の糸

花の糸

右の糸

化

化

化

化

化

化

山をよの蒼とぬし〜多々隣
杉原の行と〜んつ〜を隣
あらし〜あやふ〜危めあを隣
稽和のをも〜ま〜むせ〜杜そらぬ
山〜し〜樹の〜らぶ〜し〜あ〜は
あせ〜綿の〜糸あせ〜法あり〜中〜隣
風ぬ〜〜柱〜お〜ま〜ら〜〜を〜隣
汝古

山を月ゆりま枝新奥なり

一冊のうらや〜し〜うら〜な〜の〜四

竹化

所〜と〜雲〜れ〜ま〜を〜ま〜を〜
と〜の〜名〜細〜の〜ま〜糸〜め〜糸〜お〜指〜〜して
鴉の〜羽〜〜文〜〜白〜修〜
山乃〜か〜い〜ら〜〜〜踏〜〜物〜れ〜れ〜
松を〜〜ら〜あ〜き〜ま〜ら〜の〜根〜花〜屋
松葉
松二
岸六
昔石
汝古

浅紅のよ痛の如く痒らうるを

里内

ち〜 依^レ杖のうきめ^ニあ^ル様

那由

流るぬかえのうらむ番^ハゆ〜

英

叶^ハの敷を〜〜〜

不

流^ラ卯^ム不^レ持^ルちよものおさ〜

六

社名^ノの雨のこけ^レれてい^キむ

化

追^ハ風^ハお^レ流^レ流^レを〜〜

た

石^ハ〜〜〜

六

相^ハ〜〜〜

化

土^ハ〜〜〜

英

を〜〜〜

あ

自^ハ〜〜〜

六

児^ハ〜〜〜

二

ひ〜〜〜

右

い川とよもをさうちかろく麻城
怪しき少法は走るま代
誇笑しそぬお易のむれ友
ゆのゆを誘ひ若し少時

何 二 由

右短歌行

一 座探歌

小春とよ花のゆいそをさるへ

松葉

仰り花淑き出りりさの月
火をさうてふるれをさる網代身
板橋のころさうさう柳
片山の日影をさる夕
笑ぬをさるさるさる菊
菊あり樹ありさるさる
風の松葉細く浦をりら

里伯 那由 次言 叶化 有石 岸六 松二

時お月十一て 五十年念恩火

昇六

著りきるの修や殊らるる来

少事これそり向か途(轉

きりくと岩屋のあは流地て

馬のけしよますし(の麦

能めりきり(田の近きと(尾

村のきり(て只後(て

松二

丁彦

ぬあ

段長

那白

新ら(り(さ(り(る(月(は(教

あふれ(陽(ま(き(轍(と(う(つ(く

深(の(ま(寂(然(な(り(く(賣(山(は(る(る

小(事(も(は(る(不(足(の(と(も(ち(り(る(る

當(ま(り(似(合(ぬ(馬(を(る(の(苦(力(織(る

ふ(業(り(く(丈(の(ま(る(吠(る

白(毛(を(使(は(す(の(一(く(も(み(る

州北

有在

松英

二

多

化

右

梅や柳一河の春らし

梅

氣の定む後もぬ志をいぬ

、

因幡業師の浦ぬあはし

化

ちよ〜〜とてさるもの艶

不

吾は浮きよれとぬと流き

榮

つくぬ眼を物ぬんらうこらふ

=

船片をたて又陸の目

差

さあ〜〜とてさるもの艶

ありし

在

和の入て〜〜と引し棟立

水

ゆき雪〜〜とてさるもの艶

も

母の神は〜〜と子羽目

化

善自〜〜とてさるもの艶

、

あ〜〜とてさるもの艶

ち〜〜とてさるもの艶

ふ

らんぼくけして新水ぬを精
木のるよりあまきし水か首は月
出のあをほふふ影のさる
葉山子も詠す水ん松の破れ是
ちとあまの影の股くさる
多しとくに脈フメの氣くさる申
こんとあまね清ハ何の時
六

清人の書と自らさしりも
ともし奴を暖とさる書
あ

右より何り

とれ海を雨の降せや若のり
あまのあま
待たる枝ののし書くれ
とれぬ周し持とあまる
二
あ
あ

何ふ〜〜ちぬる〜〜風で

州化

や〜〜曙の〜〜を〜〜り

丁差

折知〜〜月の夜を〜〜入〜〜し

松二

寝〜〜解〜〜れ〜〜に〜〜ま

那由

ぬ〜〜揚〜〜れ〜〜い〜〜又〜〜枝〜〜何〜〜お

葉衣

け〜〜何〜〜と〜〜ま〜〜い〜〜程〜〜の〜〜ひ〜〜の〜〜名

里伯

浪〜〜出〜〜れ〜〜ぬ〜〜む〜〜む〜〜ん〜〜も〜〜あ〜〜ら〜〜け〜〜り

あ〜〜ら〜〜し〜〜ま〜〜り〜〜あ〜〜ま〜〜と〜〜ら〜〜ぬ〜〜あ〜〜ま〜〜ま

垣〜〜成〜〜し〜〜紐〜〜と〜〜〜〜の〜〜あ〜〜ま〜〜を〜〜け〜〜り

い〜〜つ〜〜れ〜〜る〜〜あ〜〜や〜〜と〜〜ら〜〜野〜〜の〜〜あ〜〜ま

勢〜〜織〜〜る〜〜ぬ〜〜れ〜〜い〜〜ま〜〜ま〜〜を〜〜す〜〜お〜〜ら〜〜ん

葉〜〜落〜〜き〜〜こ〜〜の〜〜あ〜〜ま〜〜い〜〜春〜〜ぬ

そ〜〜と〜〜傳〜〜ら〜〜ぬ〜〜あ〜〜の〜〜い〜〜れ〜〜り〜〜く

豆〜〜の〜〜身〜〜の〜〜け〜〜り〜〜ま〜〜あ〜〜梨〜〜子

かきこめくゆい橋さぬ柳のれ
行まよ一年をまひける秋花の茶
炸実の川橋をこころん
るる花のまじりて花さる

平此其たやあ橋のまじりて花さる
二

新集の年一因をあらわす

橋をさるる川にさるる花さる

あまのりて

苗
水

あまのりて川にさるる花さる

橋をさるる川にさるる花さる

あまのりて川にさるる花さる

あまのりて川にさるる花さる

あまのりて川にさるる花さる

御下 申事 申す 一 店の繁栄 申す 里 伯
うらやま 申す 申す 申す 申す 申す 申す 申す 申す
大陽の 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉
わが 法 法 法 法 法 法 法 法
日 日 日 日 日 日 日 日
多 多 多 多 多 多 多 多

うらやま 申す 申す 申す 申す 申す 申す 申す 申す
大陽の 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉 枝葉
わが 法 法 法 法 法 法 法 法
日 日 日 日 日 日 日 日
多 多 多 多 多 多 多 多

那らぬ縁空の月

仙

かたむかひたる袴の先の舟に

白

まじりてと行列の徳

白

新雨の風おちりて

二

此後一際一なるは

由

命をいへば心もささるる

仙

大雲をたふす山は

一

石と土橋の太八川

一

震くくすのたまり

衣

さびの月白雲ありの志

身去

神をささるる強神の机

一

後ろし船の舟一棹

あ

我らつて形りもる武庫山

二

天怪のありて一機

二

母一舞〜まら梅の舞
 ち〜ま〜歳よま梅の舞
 梅も梅も梅の友とち

右の曲

ち〜ま〜やの平ふ〜宵の夜

叶由月才の七の夜
 双鶴亭

侍り〜ら〜ん〜も〜や〜小妻〜も〜う
 里伯

運〜り〜も〜あ〜れ〜の〜者
 衆

う〜た〜も〜〜ま〜も〜梅〜も〜ぬ〜山〜あ〜ら〜う〜て
 沢

多〜ぬ〜〜〜能〜も〜れ〜ぬ〜も〜も〜う〜こ〜し
 井

阿〜々〜ら〜ら〜め〜ぬ〜子〜供〜の〜友〜の〜ぬ〜え
 那

け〜も〜の〜都〜を〜と〜え〜知〜〜ま
 松

お〜〜い〜ま〜の〜傍〜を〜ら〜る〜の〜月
 琴

舞合しそとれのおのちのち
有石

浮上る新よ初の花を付けて
松葉

舟の神解をも業もつら
葉石

ちそあゆの族鹿をり軍一立
葵

まらしむ物よまてふ岐崎
花

物知をこしはけてまらぬ花は
二

下 仲人よへし所彌 経
有

への字お解りくのちお解り方也
葵

まらぬ物よまてふ岐崎
花

虹乃 悔をぬけてお上りふら月
仙

洗つてまらぬ物よまてふ岐崎
花

らちをみて健を候ふ松葉
花

まらぬ物よまてふ岐崎
花

土丹細工乾く花をひ松葉
花

曠と深き、湖のうら

莫

三才 福知しきもの政をとくり

多

何んぞ枝身とみよの交代

あつふよ何しと生れ川あれ

英

此方そあるをその常い

仙

井とあまの女子をけり物をもとに

之

以宗師の徳の絶ぬ証なる

た

帷子れ汗ぬきてけり衣後梓

仙

五そくわれに程十涼うせ

之

そと交の神ぬて言ひ車垣

仙

まきいそま人もまき母の徳

之

伏座にふあふ癒し脚し

莫

とれは何はあつ葉のそと

二

何ふかふは流らなむの后の月

莫

ハリスヘリ

仙甲一嘆く岩の頂

六

仙人の栖とてまや山つらん

仙

や持おのり橋の吸角

仙

日の鳥おんく耕よわ使きい

二

深こしそまきし御のまき

た

乙女子の本座をとり御し拾ひはし

英

申吉国上乃踏歩をさへ

英

餅を精まきく糖をききしあり

仙

海平ハとんとははの所はし

、

赤心一函をわらしあ

、

早やうこまこら仕合

あ

は髪をたたくて美人の伸る入

英

時り此に砂小濠りまきり

六

細きとくきあのをさきり物のみ

七

耕のうらをこりしりり
 紙幣もあはれいふ後いひおき
 うれきやうめきさうくくくを布
 しまもり能く運りしり子の夢
 破を空かし清く清く指
 何れ後ういきりえの穢れは
 松のよめをうめをくめ吹

三 菜 此 三 此 菜 三

何れやうの田子ういほくしり
 ゆきしりぬぐうしりぬぐう
 せらぬきを清めぬる温るの味
 何れをやくしりぬぐう戦 菜
 せらぬきを清めぬる温るの味
 刻して三つしりぬぐうの味を
 六 此 伯 菜 二

入し能て刑柄行つて
いりしうしをばいふ様迄は
若の程にうれをきり
三又ぬの梅中りし
傳をうしはあく
指股由法とゆ代
生ししやまを
三

柄と自らを記つても
三

刑 拾うしを
三

右七十二候

十二月十一日 氣の居る日

志

浮舟の明りしを
三

多しとてきりし月やりの
三

増減りしるくして流の世に枝一 錦古

来りよあけり多き声一 松葉

美扇の汚さし出例一 里伯

あき油一 頰一 白一 松二

あま〜風をきくやん 雨り一 隈一

百り紅の枝一 一一 嘆一 州北

候時そ梅子木の修産 一一 一角

解けてえんうん 昔い回一 多

うねいあしし新ぬぬあし一 化

手飼の尖り一 立一 行一 尖一 角

細鱈をれきりたある月一 伯

お構りや一 古一 継一 あり一 角

岩をそ給の膝一 小狐一 二一 角

程の杜りれほり一 角

白らほららひくけら御のど 菜
菓客よこ似降ふくる密長 多
いっり日法のもんをくまふ由己 解
堀れに何あてしおる源の局
十方り光りを放つ 交母しとら 亡
人目の菜をを思ひあふ井し
氷くくくくくくくぬれをを 化

まじしと下なる餅梅のまら 菜
首寄して鼻いこくくを嫁り君 二
志物のをくくくを海の上 亡
刺及し又攻はをとききしと 菜
彦り御し船の山つく 化
目し思し候く言をり候 自
おくくくくくくく木屏 菜

ありては師のあやふき
 ちり月とれむと想はれむ
 ねくははてははるね高
 ねねのとしそふふふ
 急なはる中膝中しき
 一ふし十ふはふふふ
 右ふふふ

ほう解とむふふふ

角

六

何

二

九

高

まはれぬ静業師の言をうらむと
あつちの社中追務の二書をやよと
まふ友君よりと帳あるうらむと
なみのふき社中へふら集りて
ふ向のち地とふらりぬ

道しちやにと男の秋のやまを侍

月の風しなむと弟ひのぬ

鶯直こらこまふれ風をらぬと

塩まじや〜 柳まじがみさう

かつふし整ふとゆ〜ぬつらぬ整ふ

あつちの海にそそげ

あけはるの光を

いと涼やかに

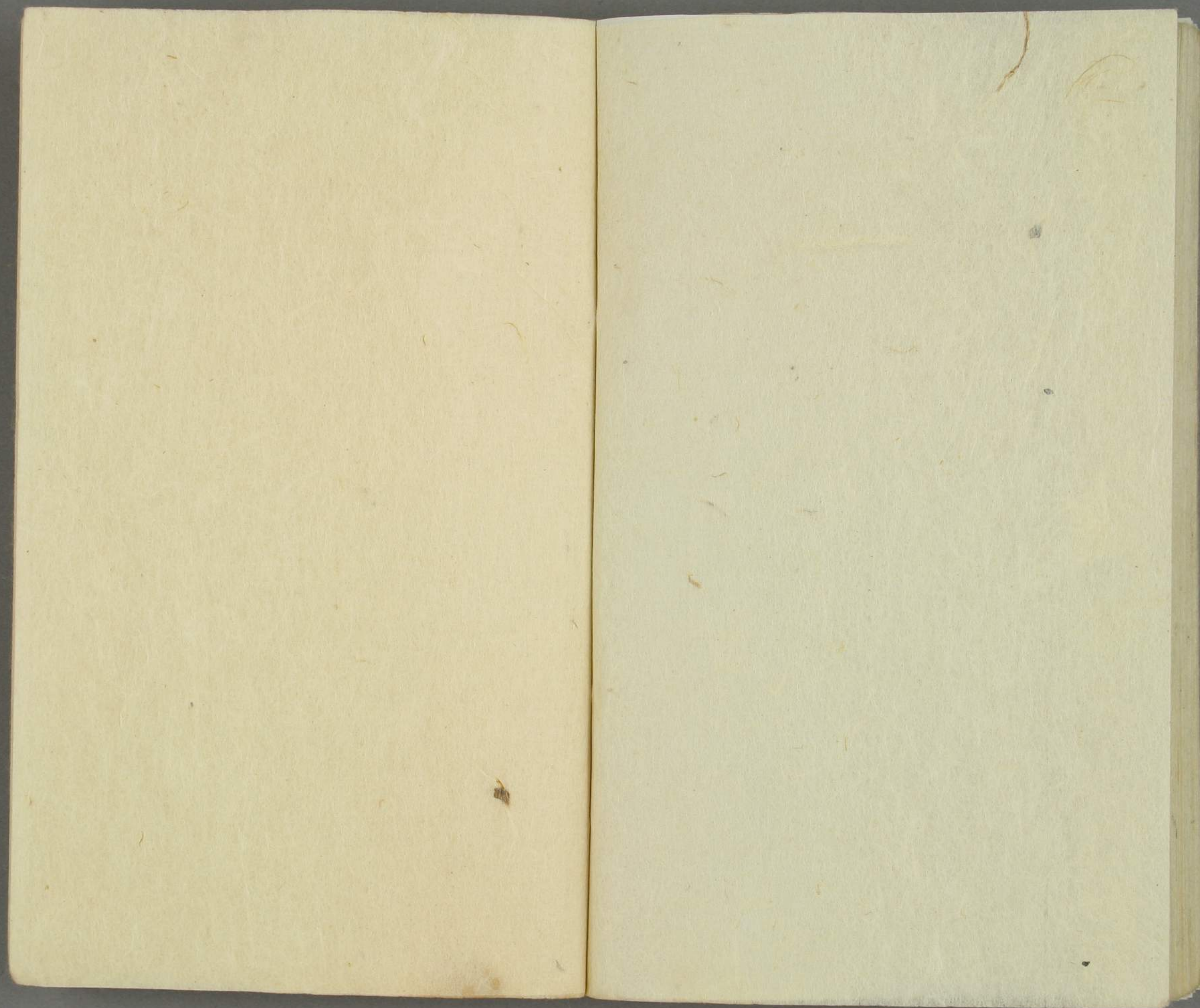
とせりのねがひ

あつちの海にそそげ

あつちの海にそそげ

あつちの海にそそげ

あつちの海にそそげ



以下全て

白紙

